

東京オリンピックとグラフィック・デザイン -1964年にみる戦後日本の歩み-

佐々木 雪乃

【要旨】

本論では、1964年東京で行われた第18回オリンピック競技大会をテーマに、64年大会のデザインワークが何を表しているかを検討した。第一章では、64年大会ではグラフィック・デザインが社会的影響力を持つことを示した出来事であったと明らかにし、第二章では、オリンピックは選手のための大会であり、国家間の競争の場ではないことから、オリンピックにおける国家宣伝は、オリンピック本来の目的を見失っていると言えることを明らかにした。第三章では、64年大会のデザインワークは戦後日本のアメリカ化を表現したものであると考察した。以上を踏まえて、64年大会のデザインは、日本のデザインが国際社会において上位に位置付けることを示した一方、デザインを国家宣伝として利用する戦前との連続性を持っており、主権回復後、戦後民主主義国家として変化した日本の現状を表したものであったと結論付ける。

【講評】

本論文は、1964年の東京オリンピックを題材にして、ピクトグラムやポスターなどのデザインとその社会的影響の検討を通じて、当時の日本社会や日本の世界的な地位を分析したものであり、スポーツと政治と美学の相互関係の考察という学術的な意味においても、きわめてタイムリーかつ重要なテーマを扱った野心的な労作である。また本論文は、グラフィック・デザインとプロパガンダの関連にとどまらず、戦前から戦後の日本社会の連続性と断絶や、民主主義やスポーツマンシップをめぐる戦後のアメリカからの影響についても、多くの資料に基づいて整理しており、いささか論の展開に冗長さが見られるものの、優れた卒業論文と判断される。